

OE *bereafian* と前置詞句

入学直哉*

OE *bereafian* and Prepositional Phrases

Naoya NYUGAKU*

OE *bereafian*, which is one of the basic verbs of deprivation in Old English and developed into ModE *bereave*, can occur with three kinds of preposition: *of*, *at*, and *on*. OE “X *bereafian* Y *of* Z” comes from “X *bereafian* + Accusative + Genitive” and can be syntactically tantamount to ModE “X *bereave* Y *of* Z”. However, “X *bereafian* Y *at* Z” and “X *bereafian* Y *on* Z” are syntactically and semantically different from “X *bereafian* Y *of* Z”. Both “*at* NP” and “*on* NP” in the constructions must be interpreted as prepositional phrases of place.

Keywords: OE *bereafian*, prepositions, verbs of deprivation

1. はじめに

ModE において奪取・分離動詞が取る統語構造は(1)のような<steal 型>と(2)のような<rob 型>の二通りである。

(1) The thief stole the painting from the museum.

(Levin (1993:52))

(2) Tom robbed John of his money.

特に(2)の<rob 型>に関しては、他動詞の目的語 NP に「被奪取者」が生起することと「被奪取者」と「被奪取物」を指示する NP の間に前置詞 *of* が出現することに対して共時的観点からだけでは妥当な説明を与えることが困難であり、通時的考察が不可欠であると考えられる。Levin (1993:52)に示されている<rob 型>の動詞の中で、OE から存在していた語は *bereave*、*cleanse*、*free* の三語のみである。¹そこで本稿では *bereave* の祖先である OE *bereafian* を取り上げ、その統語構造を共起する前置詞句との関係から考察する。

2. ModE における<rob 型>動詞の項構造

OE *bereafian* の分析に入る前に、ModE の<rob 型>動詞の項構造に関する事実を確認しておく。これに関しては Jackendoff (1990:177)で以下のような事実が示されている。

* 基盤教育機構

- (3) a. Bill robbed/cheated/deprived Harry of his money.
 b. Bill robbed/cheated/*deprived Harry.

(3)から、rob、cheat が of NP を随意的な付加部とする二項動詞であるのに対し、deprive は of NP を義務的に補部を取る三項動詞であることが分かる。²

また、ModE bereave も通例は(4a)のような構造を取るが、(4b)の例も見られることから、この動詞も rob、cheat と同様に本来的には二項動詞であり、of NP は随意的な付加部であると考えられる。

- (4) a. The accident bereaved John of his father.
 b. The ceremony was ordeal for those who had been recently bereaved.

(OALD s.v. bereave)

この言語事実を踏まえ、次節では ModE bereave の祖先である、OE *bereafian* の統語構造を考察する。

3. OE *bereafian* の統語構造

OED、Visser (1963)、小島 (2012)から収集した OE *bereafian* の用例を整理すると、当該動詞は以下のような三通りの統語形式を持つ。

- (5) a. *bereafian* + Accusative + Genitive
 b. *bereafian* + Accusative + Dative
 c. *bereafian* + Accusative + Prepositional Phrase

(5a)と(5b)の実例は各々以下の(6)-(7)である。

- (6) a. hafað nu se halga helle bireafod ealles þæs gafoles
 has now the saint hell-ACC deprived all the tribute-GEN
 ‘the saint has deprived the hell of all the tribute’ (Christ 558-559)(ModE 訳筆者)
 b. he hie bereafade heora clapa 7 heora wæpna
 he them-ACC deprived their clothes-GEN and their weapons-GEN
 ‘he deprived them of their clothes and their weapons’

(Oros. 122, 3 / Visser (1963:614)) (ModE 訳筆者)

(7) a. Bona swylce læg, egeslic eorðdraca ealdre bereafod
 killer also lay dreadful earth-dragon life-DAT deprived
 ‘The killer, dreadful earth-dragon, also lay deprived of his life’
 (Bwf. 2824-2825) (ModE 訳筆者)

b. his cyrice eallum hire æhtum wæs bereafod
 his church all his possessions-DAT was deprived
 ‘his church was deprived of all his possessions’
 (Bede 581, 4 / Visser (1963:620)) (ModE 訳筆者)

(5c)に関しては前置詞句の主要部として、*at*、*of*、*on* の三通りの前置詞が生起する例が見られる(cf. OED、Visser(1963)、小島(2012))。(8)-(10)に各々の実例を示す。

(8) Ða geseah Moyses þæt Aaron hæfde bereafod þæt folc æt heora
 Then observed Moses that Aaron had robbed that people-ACC at their
 golde for þam unrihte þe hi gedon hæfdon
 gold for the wrong that they done had
 (その時モーゼは、アロンが人々が行った悪事のため彼らから金を奪うのを目撃した)
 (HEPT (Ex) 32:25 / 小島 (2012:223))

(9) ho hine bereueden of þere muchele mihte
 they him-ACC robbed of that great power
 ‘they deprived him of that great power’
 (O.E. Hom. i, 79 / Visser (1963:638)) (ModE 訳筆者)

(10) He mid sumum hloþum for and monega byrg bereafode on Cheranisse
 he with some troops set forth and many forts robbed on Cheranisse
 (彼はいくらかの軍を率いて出かけ、Cheronesus 人から数々の町を略奪した)
 (Ors 64:10 / 小島 (2012:223))

次節では OE *bereafian* と共起するこれら三種類の前置詞に関する先行研究の扱いの問題点を指摘し、代替案を提示する。

4. OE *bereafian* と共起する前置詞の分析

まず、OE *bereafian* と共起する前置詞 *at* と *of* に関する以下の OED と Visser(1963)の記述を見してみる。

(11) †b. with *at* for *of*. *Obs.*

c 1205 LAY. 30311 *Ic hine biræuien wulle · at his baren lieu* [1250 *bireauē...of his bare liue*]. (OED s.v. *bereave*, *v.*)

(12) **Bereve at (now of)**. c1205 Layamon 30311, *Ic hine biræuien wulle at his baren lieu*. | a1200 *Body & Soul* (Buchholz) 4, 7, *beræfed At þene æorliche weole*.

(Visser (1963:640))

(11)-(12)の記述は明らかに、OE *bereafian* (>ME *bereve*)と共起していた前置詞 *at* が後に *of* に置換されたことを示唆している。しかし、前置詞が機能語であるがゆえに、ほとんど意味変化を起すことなく、OE から ModE までその原義を保持していることを考慮すると、ゼロ次元場所前置詞である *at* の原義は「一点」であり、*off* の弱形である *of* の原義は「分離」であるから、両前置詞が英語の歴史において互いにその意味領域を共有した事実を認めることはできない。即ち、(11)-(12)の記述は意味論的には整合性に欠けるものである。このような記述が生じるのは統語的側面からのみ構造を観察していることに起因すると考えられる。換言すると、(8)-(9)及び(11)-(12)の統語構造を以下のような同一の構造で捉えていることに原因があると思われる。

(13) X *bereafian* Y at Z = X *bereafian* Y of Z

しかしながら、ModE の<rob 型>の構造である“X *bereave* Y of Z”の起源は OED の以下の記述を待つまでもなく (5a)に遡る。

(14) 1. *trans.* To deprive, rob, strip, dispossess (a person, etc., *of* a possession; the latter orig. expressed by the genitive). Since c1650 mostly of immaterial possessions, *life*, *hope*, etc., except in reference to the loss of relatives by death. (In the former case *bereft*, in the latter *bereaved*, is more usual in the pa. tense and pa. pple.) (OED s.v. *bereave*, *v.*)

上で示した OE *bereafian* 及び ME *bereve* が前置詞 *of* と共起する例はいずれも LOE もしくは EME の作品であり、これは格形式、即ち、属格で表されていた所有表現が、徐々に前置詞 *of* に置換され始めた時期と重なる(Cf. Rosenbach (2002:179-180))。つまり、OE における“X *bereafian* Y at Z”と“X *bereafian* Y of Z”は表層構造が類似していることと、この構造において前置詞 *at* の出現は ME 以降見られないことから、一見すると *at* が *of* に取って代わられたように思われるが、両構造の起源はまったく異なるものである。

OE の“X *bereafian* Y of Z”は ModE までその構造を保持しているが、その起源は(5a)-(5b)に示した“*bereafian* + Accusative + Genitive”と“*bereafian* + Accusative + Dative”と深く関わっているため、この構造の分析は稿を改めて論じることとし、以下では“X *bereafian* Y at Z”に関して意

味論的な考察を行う。

まず前置詞 *at* に関してであるが、上述したように当該前置詞は「一点」を原義とする場所前置詞である。これは場所前置詞の代表格である三次元空間を表す *in* と比較するとその意味が鮮明になる。

(15) a. Tom lives *in Boston*.

b. The conference will be held *at Kyoto*.

(15a)において *in Boston* はボストンという都市を三次元空間と捉えている。都市には様々な構造物が存在し、人間は都市空間の中で生活しているわけであるから、*in Boston* のように都市は本来的には三次元空間と捉えられるべきである。しかしながら、(15b)に見られるように都市名が *at* の目的語に来る場合がある。繰り返しになるが前置詞 *at* の原義は「一点」である。つまり、*at Kyoto* は、京都という都市を一点で捉えていることになる。それは言うまでもなく地図上の一点である。

従って、(16)のように駅を地図上の一点と捉えた場合、*John* が駅の内部に到着したのか、外部に到着したのかは不明である。

(16) John arrived *at the station* and he was $\left\{ \begin{array}{l} \textit{inside} \\ \textit{outside} \end{array} \right\} \textit{the station}$.

上で観察したように *at* が駅などの明確な境界線を持つ構造物を目的語の NP に取る場合、現実世界では三次元の物体が言語の世界ではゼロ次元化されるがために、内部と外部の区別が不明瞭になる。換言すると、*at* は三次元の具体物を境界線のない抽象物へと変化させる力を持つと言える。これが以下のような目的語の NP の意味の抽象化へとつながる。

(17) Ann works $\left\{ \begin{array}{l} \textit{at} \\ \textit{in} \end{array} \right\} \textit{a publishing house}$. (Quirk et al. (1985:676))

Quirk et al. (1985:676)は(17)において *in a publishing building* では建物は三次元の構造物を表すが、*at a publishing building* では建物によって表される組織あるいは機能の側面に言及すると述べている。以下の(18)でも同様の意味の違いが生じる。

(18) She's $\left\{ \begin{array}{l} \textit{at Oxford} \text{.} \text{ [‘She’s a student at Oxford University.’]} \\ \textit{in Oxford} \text{.} \text{ [‘She’s staying, etc. in the City of Oxford.’]} \end{array} \right\}$ (Quirk et al. (1985:676))

このように *at* は具体物を意味的に抽象化させることができるため、以下のように抽象名詞と結合するのは当然のことである(Cf. 森山他 (2010:120-122))。

(19) a. She saved him from the fire but *at the cost of her own life* (=she died).

((彼女は火事から彼を救ったが、彼女自身の命を犠牲にする場所にいた)→彼女は自分自身の命を犠牲にして彼を火事から救った) (OALD s.v. *cost*)(日本語訳筆者)

b. We were *at the mercy of the weather*.

((私達は天気のままの場所にいた)→私達は天気に左右された) (OALD s.v. *mercy*)(日本語訳筆者)

ここで現在議論している OE の“X *bereafian* Y at Z”に立ち返ることにする。まずこの構造に現れる *at* の目的語 NP に着目する。以下に(8)を(20)として再掲する。

(20) Ða geseah Moyses þæt Aaron hæfde bereafod þæt folc æt heora
Then observed Moses that Aaron had robbed that people-ACC at their
golde for þam unrihte þe hi gedon hæfdon
gold for the wrong that they done had

‘その時モーゼは、アロンが人々が行った悪事のため彼らから金を奪うのを目撃した’

(HEPT (Ex) 32:25 / 小島(2012:223))

(20)では *bereafod þæt folc æt heora golde* に対して小島(2012:223)は「彼らから金を奪う」という日本語訳を付しているが、これは(11)-(12)に示した、OED、Visser (1963)と同様に ModE の<rob 型>の構造が念頭にあるためと考えられる。また *heora golde* を「彼らの金(=their gold)」と解釈しているが、そうすると *þæt folc æt heora golde*(≡ModE the people at their gold)は「場所でも三次元の構造物でもない金を一点化した場所に位置している人々」という奇妙な解釈になってしまう。ここでの *gold* は以下の OED の記述に見られるような *wealth* という抽象概念で捉えるべきではなかろうか。³

(21) 2.a. The metal regarded as a valuable possession or employed as a medium of exchange; hence, gold coin; also, in rhetorical use, money in large sums, wealth.

(OED s.v. *gold*¹)

つまり、(20)における *þæt folc æt heora golde* は「(富がある場所にいる人々)→富を持っている人々」のような意味で取るべきであると考えられる。同様に(11)における *hine...at his baren lieu*(≡ModE him at his bare life)は「(ほんのわずかな命がある場所にいる彼)→かろうじて生きている

彼」という解釈になる。

次に“X *bereafian* Y on Z”構造について考察する。前置詞 *on* の原義は「接触」である。ある物が別のある物と接触している状態が *on* である。従って、当然 *on* も場所前置詞である。線への接触を表す場合は一次元前置詞であり、面への接触を表す場合は二次元前置詞である。これに関して Quirk et al.(1985:676)は以下のように記述している。

(22) Dimension-type 1 and 2:

line:	The city is situated	{	<i>on the River Thames.</i>
			<i>on the boundary.</i>
			<i>on the coast.</i>
		{	<i>on the wall.</i>
surface:	A notice was pasted		<i>on the ceiling.</i>
			<i>on my back.</i>

では(10)の“X *bereafian* Y on Z”の用例はどのように分析すればよいであろうか。以下に(10)を(23)として再掲する。

(23) He mid sumum hlofum for and monega byrg bereafode on Cheranisse
 he with some troops set forth and many forts deprived on Cheranisse
 (彼はいくらかの軍を率いて出かけ、Cheronesus 人から数々の町を略奪した)

(Ors 64:10 / 小島 (2012:223))

第一の問題点はここでの *on Cheranisse* を「Cheronesus 人から」のように被奪取者と捉えていることであるが、これはすでに指摘したように ModE の<rob 型>の構造に引きずられているからであると思われる。

第二の問題点は *Cheranisse* を「人」と解釈している点である。前置詞 *on* の原義が「接触」であることを考慮すると、たとえこれが「Cheranisse 人全体」を指し示しているとしても、*monega byrg...on Cheranisse* は「Cheranisse 人と接触状態にある多くの町」という意味的に不自然な解釈になってしまう。不自然さが生じる理由は *monega byrg* と *Cheranisse* の位置関係の捉え方にある。次の(24)を見てみる。

(24) a. There is a cat on the floor.

b. ??There is a floor on the cat.

(24a)-(24b)はいずれも「猫」と「床」とが接触状態にあるという、二つの物体の位置関係に言及

している表現であるが、(24a)が自然な表現であるのに対して、(24b)は極めて不自然である。なぜなら認知言語学的には、我々は二つの物体の位置関係を知覚する際、移動物(もしくは移動する可能性のあるモノ)あるいは狭い領域を占めているモノを知覚的に最も際立つトラジェクター(trajector)と捉え、静止物あるいは広い領域を占めているモノをトラジェクターの基準点となるランドマーク(landmark)と捉えるのが一般的であるからである(Cf. 深田他 (2008:86-87))。つまり、(24a)では移動する可能性のある「猫」がトラジェクターで、トラジェクターよりも広い領域を占めている「床」がランドマークとなっているので自然な表現となるが、(24b)はその関係が逆転しているために不自然さが生じるのである。⁴

ここで *monega byrg...on Cheranisse* において *Cheranisse* を「*Cheranisse* 人」と解釈すると不自然になる理由が明らかとなる。つまり、(24b)と同様に静止物である *monega byrg* がトラジェクターとなり、移動物でありなおかつトラジェクターよりも狭い領域を占める *Cheranisse* がランドマークになってしまうからである。そこで筆者は(23)における固有名詞 *Cheranisse* は人名ではなく地名と解釈することを提案する。⁵すなわち、*monega byrg...on Cheranisse* は字義通りには「*Cheranisse* という地域に接触している多くの町(もしくは砦)」である。したがって、(23)の意味は「彼はいくらかの軍を率いて出かけ、*Cheronesus* にある数々の町(もしくは砦)を略奪した」となる。前置詞 *on* が場所前置詞であることを考慮に入れると、このような考え方が論理に適っていると思われる。

5. 結語

本稿では OE *bereafian* と共起する三つの前置詞 *of*、*at*、*on* について論じた。まずこれらが先行研究において、すべて ModE の <rob 型>の構造に現れる *of* と同一の扱い、即ち、「X *bereafian* Y of Z」、*“X bereafian Y at Z”*、*“X bereafian Y on Z”*において、各々の前置詞の目的語 NP がいずれも「被奪取物」と扱われていることを指摘した。ModE にその構造を残す *“X bereafian Y of Z”* に関しては問題ないとして、*at NP* 及び *on NP* を同様に分析することには疑問を呈さないわけにはいかない。「分離」を原義に持つ *of* とは異なり、*at* と *on* は各々「一点」、「接触」を原義とする純然たる場所前置詞である。たとえば *at* は三次元の構造物を目的語に取る場合、それを境界線のない一点と捉えることから、その構造物の内部を指しているのか外部を指しているのかに関しては不明瞭である。ここから *at the cost of* のように抽象名詞を目的語に取る表現が可能となる。OE の *“X bereafian Y at Z”* の用例を観察すると、いずれも *at* の目的語 NP は抽象名詞と捉える事ができる。即ち、*“X bereafian Y at Z”* における *at NP* は抽象的场所に言及しているといえる。また *“X bereafian Y on Z”* における *on NP* も場所前置詞句であることを論じた。*“X bereafian Y at Z”* と *“X bereafian Y on Z”* に関して先行研究が誤った分析を行った要因は偏に ModE を通して OE を観察していることと、機能語であるがために前置詞の意味を考慮していないことによると考えられる。

注

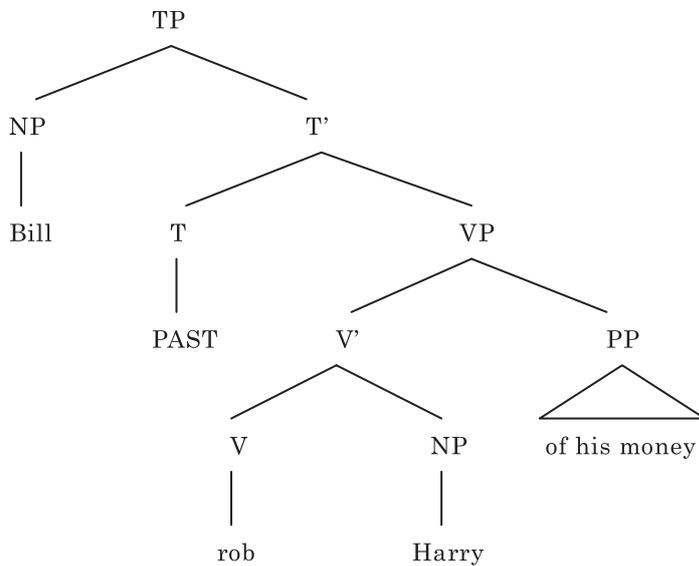
1. Levin (1993:52)で示されている<rob 型>の動詞のリストは以下の通りである。

Non-Alternating *of* Only:

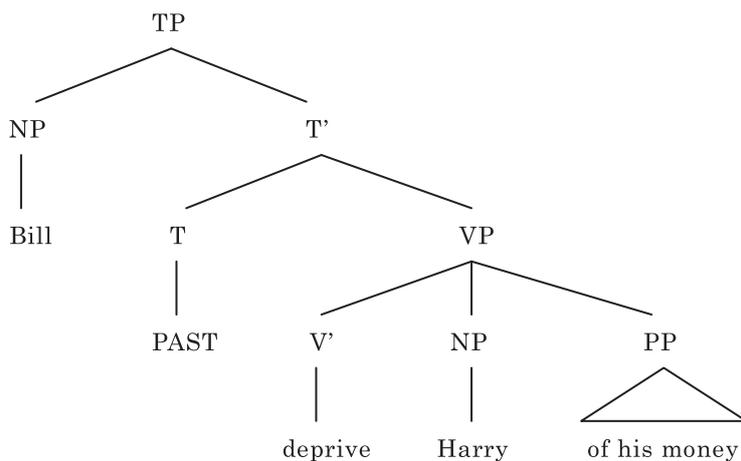
*CHEAT VERBS: absolve, acquit, balk, bereave, bilk, bleed, break (of a habit), burgle, cheat, cleanse, con, cull, cure, defraud, denude, deplete, depopulate, deprive, despoil, disabuse, disarm, disencumber, dispossess, divest, drain, ease, exonerate, fleece, free, gull, milk, mulct, pardon, plunder, purge, purify, ransack, relieve, render, rid, rifle, rob, sap, strip, swindle, unburden, void, wean

2. (i) Bill robbed Harry of his money. と (ii) Bill deprived Harry of his money. の構造の相違は以下のように示すことができる。

(i) Bill robbed Harry of his money.



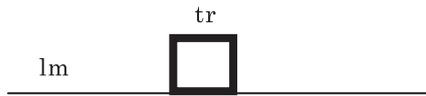
(ii) Bill deprived Harry of his money.



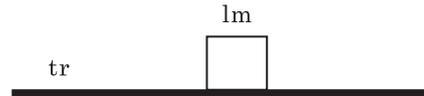
3. 例えば、goldgifa(=ModE gold-giver)は字義通りには「黄金を与える人」という意味であるが、この複合名詞が古英詩において「家臣に報酬を与える人」という意味で *cyning* 等のケニングとして用いられることも、gold が OE においてすでに抽象的意味を有していたことの傍証となる。

4. (24a)-(24b)のイメージスキーマは各々以下の(i)-(ii)である。

(i) = (24a)



(ii) = (24b)



5. Bately (1980:414)では *Cheranisise* に対して以下のような語彙解説を与えている。

Cheranisise *dpl.* Chersonese 64/11

Chersonese とはクリミヤ半島にあった古代ギリシアの植民都市のことである。

謝辞

本研究は平成 24 年度福井工業大学特別研究費の支援を受けている。記して謝意を申し上げる。

参考文献

- Allen, C. L. (2008) *Genitives in Early English: Typology and Evidence*, Oxford University Press, Oxford.
- Bately, J. ed. (1980) *The Old English Orosius*, Early English Text Society Supplementary Series 6, Publish for the Early English Text Society by the Oxford University press.
- Dobbie, E. V. K., ed. (1942) *The Anglo-Saxon Minor Poems: The Anglo-Saxon Poetic Records VI*, Columbia University Press, New York.
- Dobbie, E. V. K., ed. (1953) *Beowulf and Judith: The Anglo-Saxon Poetic Records IV*, Columbia University Press, New York.
- 深田智他 (2008) 『概念化と意味の世界』研究社, 東京.
- Hall, J. R. C. (1960) *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*, with a Supplement by H. D. Meritt, 4th ed., University of Toronto Press, Toronto.
- Hornby, A. S. (2010) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, Oxford University Press, Oxford.
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*, The MIT Press, Cambridge.
- 荻部恒徳他 (編) (2007) 『古英語叙事詩ベーオウルフ対訳版』研究社, 東京.
- 小島謙一 (編著) (2012) 『古英語辞典』大学書林, 東京.
- Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, University of Chicago Press, Chicago.
- 森山智浩他 (2010) 『英語前置詞の概念—認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から—』ブイツーソリューション, 愛知.
- Mitchell, B. (1985) *Old English Syntax*, Vol.1. Clarendon Press, Oxford.
- 入学直哉 (1999) 「語彙意味論と古英語受動構造」『甲南英文学』第 14 号, 甲南英文学会.
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Rosenbach, A. (2002) *Genitive Variation in English: Conceptual Factors in Synchronic and Diachronic Studies*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Simpson, J. (2009) *Oxford English Dictionary*, 2nd Edition, Version 4.0, CD-ROM, Oxford University Press, Oxford.

Visser, F. Th. (1963) *An Historical Syntax of the English Language*, vol. I, E. J. Brill,

(平成 25 年 3 月 31 日受理)